

飲水思源

町長

松岡市郎

故飛彈野数右衛門氏と町制施行50周年

私たちの大先輩で「写真は100歳まで撮る」が目標であった元収入役、飛彈野数右衛門氏が逝った。94歳だった。無類のカメラ、写真好きで知られていた。心からご冥福をお祈りします。

飛彈野氏は14歳からカメラを手にしていたという。いつもカメラを持ち、80年に渡り町で出会った多くの人々や風景を写真に撮った。その数は2万点を超え、生前町へ寄贈いただいた。私も5、6回写真をちようだいた。

飛彈野氏の写真が高く評価されたのは、東川町が写真の町を宣言して17年目。東川賞特別賞を受賞してからである。

2008年、東京写真月間を主催する日本写真協会が飛彈野氏の写真を取り上げ、東京・品川のキヤノンスタワーで作品展となった。この写真が著名な元NHKプロデューサーの目にとまり、NHK教育テレビ「新日曜美術館」での放映が決まったのである。

残念ながら、飛彈野氏は取材の途中で亡くなってしまった。「各家庭にアルバムがあるように、町には素

晴らしいアルバムがある、町の素晴らしい財産」とプロデューサーは言う。北海道新聞も2度に渡り大きく飛彈野さんの写真を紹介した。「お会いして記事を書きたかった」と記者は残念がった。テレビや新聞を見た人から「素晴らしい、感激した」とメールや手紙、電話をちようだいたする。「ありがとう」とお互いに感謝の言葉が出る。

東京での作品展では、約50年前の自分を偶然に発見し感激した。「誰か知っている人はいないか」と見た写真が昭和34年の町制施行の祝賀パレード。小学校3年生当時の懐かしいクラス仲間の中に自分が写っていた。

この写真に出合わなかったら、今年が町制施行50周年とは気が付かなかった。写真は「記憶と記録」であり、「真実を写し、心を映す」大切な財産である。

今年、町制施行50周年と写真の町宣言25年を記念して、各家庭にある思い出写真も活用し、「写真で見える町制50周年」(仮称)を編集したい、と思いを馳(は)せている。

短歌

夫逝きて残る余生にライン引く生の限界自らなるや
施設にてかるたに興ずる友ふたりこの穏やかさ永久にと祈る
命日に義兄を偲びて十三回忌うからと務め夫と安らぐ
ともすれば沈みがちな日々を耐え一人じゃないよと吾を励ます
手作りの食事たすさえ友来たり強く生きよと励ましくる
好天あり吹雪の有りに凍てつきし春待つ桜木凜として在り
温暖化ただ有難く老いの身はされど地球の異変を憂ふ
新らしき法語カレンダー今日も読む生かされているありがとうさま
誕生日日出度くないと言ふ吾に孫は丁寧な御愁傷様とふ
雪が降る露天の湯舟しずもりて綿ぼうし被ったままのひとりきり
劇中の恍惚の人の言所作に笑つて泣けど人ごとならず

那須喜美
松倉和子
岡澤チズ子
中田治子
清水チヨ
嶋崎ミエ
矢沢ますえ
永江栄子
笹田富士子
宮坂敬子
瓜生昭枝

俳句

蒼穹の一点指すや冬ボラ
二月尽試着してみる野良着かな
雪見酒ホロホロ酔うて夢見頃
シャンツエ蹴り風つかまえて鳥になる
魚のごと堤を上る二月かな
寒の月北斗の杓も逆立ちて
風花も窓ごしに聞くコンサート
音もなき二月の夜に刻む時
歳時記のもっとも薄き二月かな
振りおろす仏師の一打冴返る
方丈の樹間に春の陽がこぼる
二月尽治癒待つ女の土不踏
添え竹のしなる重さの二月かな
二ん月や馳せる田作りゆめびりか

徳光吐苦
杉山りつ
山口佐知子
高瀬潤
石澤清宏
澤田久美子
松山蓉子
三島智
長谷川きみ糸
小林露葉
青野公花
宮坂紫雲
秋山深雪
杉山ひろのり